

災害を越えて

甚大な被害と大きな爪痕を残す地震や水害。この国に暮らす以上、どこでも誰にでも起こりうることもなかもれない。企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」の開催に関連して、東日本大震災における被害と、それを乗り越えていこうと奮闘する人びとの姿に加え、阪神・淡路大震災と熊本地震という、過去そして現在の災害とそこから始まった活動をとりあげ、これから起こりうる災害と対峙するであろう「われわれ」の可能性として考える。

企画展 津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録
会期 二〇一七年一月一九日(木)―四月一日(火)
場所 国立民族学博物館 本館企画展示場

去過程で見つかる書類やアルバムの整理と清掃が仕事である。書類のなかには通帳や権利書さえあったので、普通ならば役場職員の仕事である。しかし、津波によって役場が破壊され、三分の一の職員が命を奪われた大槌町役場にその力はなかったのだ。
一カ月後、わたしたちは地元有志がはじめた復興まちづくりの手伝いをするようになる。それと並行して、災害を記憶するための博物館等



東日本大震災の翌年のホタテ収穫



んだら、みんなで道路つけつつあったことになって。ヘリポートがあるわけだべ、農村広場にさ。
で、ヘリで物資を持ってきてても駄目だったって。最初ははあ、小学校からヘリポートの農村広場まで

芳賀藤一

吉里吉里はやっつたんです。消防分団の消防車も、重機、石油燃料も。一切外部との連絡がとれないんでね。災害対策本部を立ち上げる、地域の人たちで。最初来たマスコミの人たちがね、町の運営所だと思っていたんですよ、災害対策本部だから。しかし実態は吉里吉里地区避難所運営所みたいな感じで。そこで道路確保とか、ヘリポート確保とか、そういうことをやっつた

芳賀正彦

震災の翌日、燃え続ける大槌町中心部(撮影・小川芳春)

の施設が建設されるだろうと考えて、資料を集めはじめた。津波の痕跡の写真を撮り、人と会って話を聞き、許可を得てビデオに収録した。インタビューした方は二五〇人にのぼり、ビデオ撮影も五〇人を超えている。

展示は何を目指すのか

今回、みんぱくで実施する「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」は、東日本大震災から五年半を経てようやく実現した企画展である。展示はこの地震にかかわるものだが、それを広く伝えるというより、わたしが通っている大槌町に焦点を当てている。地元の人びとが撮ったビデオや写真、語り、証言を中心に、わたし自身がつくった模型や、被災前の町の姿を再現した模型や、彼らの生活と文化をあらわす民俗資料を加えて構成されている。

展示のねらいは、震災で大きな被害を出した大槌町の人びとが、地震と津波をどのように経験したかを再現することにある。彼らがどのように津波を逃れたか、あるいは逃れなかったのか。数日にわたり外部から遮断された彼らがか、どのように助け合いながら生き延びたのか。いくつかの避難所では被災者自身の手で五カ月にわたって炊き出しをおこない、がれきを撤去して道路を開削したが、そうしたことがなぜ可能であったのか。ビデオの画面から発せられ、壁面のパネルから浮き上がってくる彼ら自身のことばこそが、展示の核心である。

東日本大震災の経験に学ぶ

竹沢尚一郎 民博 民族文化研究室

大槌町との出会い

二〇一一年三月一日、京都に住むわたしの家でもゆるやかな揺れが生じた。揺れの長さも規模の大きさを懸念させたが、テレビをつけても報道はない。報道ヘリコプターが被災地の状況を伝えはじめたのはようやく一時間後だった。壊滅的な被害を受けた三陸沿岸の市街地や集落の光景は、今も目の前に浮かんでくる。その光景にショックを受けたわたしと妻は何をするにも熱が入らなくなった。話し合ってから、支援に行くことを決めたのが数日後。とはいっても、被災地ではガソリンが入手できないという。ガソリンの流通が再開したとの報道があった四月初旬、車に TENT や寝袋、二週間分の食料を積み込んで、わたしと妻と娘は三人で岩手県に向けて出発した。被災地との長いつきあいはじまりだった。

建物が流されたのでテントにもうけられた大槌町のボランティアセンターに行くと、書類の整理を依頼された。自衛隊員によるがれきの撤



上：住民の吉里吉里地区対策本部会議(提供・芳賀潤)
下：震災後に設立された協同組合と真ん中おつち(提供・と真ん中おつち)

展示のなかには、沖から押し寄せ、町を破壊していく津波の威力を示すビデオがあり、町が完全に廃墟と化した被災翌日の写真がある。これらは被災者自身が撮ったものだが、見方によってはむごい印象を与えるだろう。しかしそれでも、彼らが経験した津波の恐ろしさの十分の一しか伝えていないかもしれない。

展示を通じて訴えたいのは、地震の威力を我が身に引きつけて受け止めることである。南海沖や東海沖などの大地震が生じることが予測されている今日、東日本大震災を生き抜いた人びとの経験に耳を傾けることはわたしたちにとって貴重な経験になるはずだ。将来生じるであろう地震に対して、わたしたちはどれだけの備えをおこなっているのか。地震に対して備えるために、わたしたちはなにをすべきなのか。来館者がこれらの問いを自分のこととして問うことを、わたしは願っている。

被災地のまちづくりの主役は誰か？

白澤良一 特定非営利活動法人
遠野まごころネット理事長

大槌湾の先祖帰り

東日本大震災でわたしが住む大槌町の市街地の約九六パーセントが壊滅した。築一五年のわたしの家や収集資料もすべて失い、残ったのは神仏に生かされた命だけである。



震災後に蘇った砂浜

震災数日後、大槌湾の被災状況を見に行った。目に映ったのは無惨に破壊された家屋、なぎ倒された家の屋根に船先を乗せている光景が辺り一面を覆っていた。改めて自然災害の想像を絶する恐ろしさを思い知られた。崩壊した岸壁のコンクリートが上がって海を眺めたら、何故か不思議な光景が脳裏に浮かんだ。

「湾内を覆い尽くしている倒壊家屋、車両や横転している漁船など無数の災害物を除去したら……」と考えた瞬間、なんとわたしが子どもどきのときに遊んだ砂浜や干潟、防潮林があった当時の景色が目の前に広がっているような錯覚に陥った。まさに「先祖帰り」の様相である。人工建造物を自然の力で元の形に戻したのである。

あのときの砂浜は、わたしたちの格好の遊び場であった。春は潮干狩り、夏は海水浴場となり、近隣市町村から大勢押し寄せ大変な賑わいであったことを今でも鮮明に記憶している。レクリエーションの場だけでなく、海苔やワカメの



上：コミュニティづくりを支えてくれた仲間たち。
右から2人目が筆者（提供：遠野まごころネット）
下：まちづくり説明会

まちづくりに反映されない地域の声

「二一世紀は環境の世紀」といわれている。大槌町都市計画マスタープラン（平成二六年八月）も、「豊かな自然環境の景観形成に配慮した美しいまち」を明文化している。岩手県環境基本計画でも砂浜や干潟を増やそうとしている。今を逃したなら、チャンスはないと思っている。

国や専門家も「二一世紀のまちづくりは地域が主役」と唱えている。大槌町のまちづくりフォーラムでも、「住民の意見を尊重してまちづくりをおこなう」という役場職員の答弁を幾度となく聞くが、未だにその形が見えてこない。

大槌町の戦略復興会議では、人口増の特効薬は「企業誘致」と唱えているが、それよりも「福祉と環境」を中心とした計画の推進を考えるべきである。まちづくり説明会で手をあげても、膨大なバックデータをもちながら理論武装する当局の姿勢に忸怩たる思いがある。町を俯瞰的にどのようにとらえているのか説明を求めても答えてくれない。

単に昔に戻せといっているのではない。環境の変化に応じて自然の力で回復させるべきである。何故なら豊かな生活文化は、生き物の空間、所謂、生態系があって成し遂げられると信じているからである。町民の財産である公共空間が心地よさを失っては、無機質なものになってしまう。今後の行く末が不安であり、注視していかなければならない。

三陸は芸能の宝庫

日高真吾 民博文化資源研究センター

復興に果たす芸能の役割

「三陸は芸能の宝庫」。わたしは、民俗文化財の保存活動をおこなうなかで、このことをよく耳にしてきた。

東日本大震災でおこなわれた文化財レスキューで、わたしはおもに民俗資料を担当していた。文化財レスキューは、有形の文化財を対象とするため、無形の文化財となる芸能とは直接関係がないようにみえるが、じつのところ、人びとの生活から生みだされた民俗文化財の保全を考えるためには、有形・無形の両方をみていく必要がある。二〇一一年当時、次々に再開されていく三陸の芸能の数の多さ、多様さ、何よりも地域との密接な関係については、ただただ目をみはるばかりであった。文化財レスキューをおこないながら、わたしは、東日本大震災関連のニュースでもさまざまな形でとりあげられていた「芸能の活動が三陸の復興の原動力となる」ということについて、身をもって体験していたのである。

このときに出会った郷土芸能の関係者の一人が、笹山政幸さんである。釜石市在住の笹

山さんは、ご自身も被災しながら、地域の復興活動に尽力され、また、周辺地域の郷土芸能の支援も精力的におこなわれている。わたしは、笹山さんが救出した石造の獅子頭の修復の相談を受けたことがご縁で、今日までお付き合いが続く。今回の企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」では、臼澤鹿子踊り、城山虎舞、吉里吉里大神楽の三団体を紹介いただいた。いずれの団体も、企画展のプロジェクトリーダーである竹沢尚一郎教授が、大槌町の活動拠点としていた地区の郷土芸能の団体である。

地元で活力を与える郷土芸能

臼澤鹿子踊りは、天明年間（一七八一〜一七八九年）に茨城の鹿島神社を訪れた町民が「扇州踊り」に出会い、その技術を取得して故郷に伝えたことにより完成したといわれているが、その起源は諸説あるようである。東日本大震災のときには、活動の拠点である伝承館を開放し、避難所として支援をおこなった団体である。

城山虎舞は、一九九六年、町内の若者により組織された。釜石市尾崎町虎舞の岩間久一氏の指導を受けたのが契機となった団体である。二〇〇二年より町内の栄町、須賀町地域を活動拠点として現在に至っている。東日本大震災では、活動基盤の会館、山車、虎頭、太鼓、衣装、小道具などを流失したものの、見事に復活し、教育機関等とも連携して児童生徒の参加を促進させるなど、精力的な活動を展開している。

吉里吉里大神楽は、屋号「鍛冶屋」に伝わる話では、嘉永三（一八五〇）年生まれの三浦駒吉が保存していた獅子頭を地元へ寄贈して普及につとめたことが始まりといわれている。城山虎舞同様、東日本大震災で大きな被害を受けたが、自ら稽古場を復活させた。また、津波で流失しなかった獅子頭を手本に、会員自らが獅子頭を彫るなど、力強い、再生を果たした団体である。

いずれの団体も震災前から地域に根ざし、震災後は地域復興の原動力となる活力を地元と与えている。今回の企画展では、特別に、この三団体より頭や衣装をお借りし、展示する。また、三月十九日は、みんぱく研究公演「城山虎舞 in みんぱく」を開催予定である。「三陸は芸能の宝庫」。その素晴らしさも今回の企画展で感じていただければ幸いである。



上：城山虎舞（提供・城山虎舞）
右下：白澤鹿子踊り（提供・白澤鹿子踊り）
左下：吉里吉里大神楽（提供・吉里吉里大神楽）

鬼神殿にみる震災復興のかたち ——熊本県西原村から

西原村での被災

二〇一六年四月の熊本地震、わたしが住む西原村も震度七を記録する猛烈な揺れに襲われた。四月十七日のいわゆる「本震」時、わたしは自宅で家族と就寝中だった。停電で街灯も消えた真つ暗闇のなか、妻と一緒に三日月の乳呑み児と三歳の幼児をかかえて近隣の小学

校へ逃げ、ご近所と安否を確認し合った。

夜が明けて、見慣れた風景が変わり果てていることを知った。つぶれて屋根だけになったような家々、真つ二つに割けた道路を目の当たりにして、これからこの村はどうなっていくのだろうかと、強烈な不安感に襲われた。

先の見えない様相に、本震の翌日、家族を妻の実家の徳島県へ避難させた。それから三カ月半のあいだ、わたしは西原村災害ボランティアセンターの統括として、被災地で生活しながら支援活動の差配に日々を送ることとなり、現在も支援へのかかわりを続けている。

被災の個別性と「復興」

被災地で暮らし、支援に携わるなかで、被災に強い「個別性」が存在することを感じている。それは、物理的な家屋被害の大小のみならず、世帯の経済状態や職業、家族の事情といった個々の生活の背景に基づくものであり、復旧・復興への歩みの相違として顕在化する。そして時間が経てば経つほど拡大する。例えば、集落に視点を置いてその「個別性」



宮山神社での「鬼神殿」。人びとは舞台上に腰掛けながら神楽を楽しんでいた

ふじもとのぶひろ
藤本 延啓

熊本学園大学講師

をとらえるならば、その場で自宅再建を目指す者と、別の土地での生活を選ばざるを得ない者の相違、結果として集落がバラバラになっていくことが見えてくる。社会基盤が「復旧」しても、人びとの暮らしは元には戻らない。



筆者の自宅近くの道路。激しい揺れで地盤が引き裂かれ、通行は不可能だった



神楽の舞台は地震で崩れた拝殿跡に設置されたもの。ボランティアによって作業が進められた

震災は終わらないのだ。「復興、復興」とことばではやたら聞くが、いったい「復興」とは何なのだろう。

鬼神殿のあらたな姿

そんななか、村内の宮山神社で例大祭があった。毎年一月三日に開催されるこの祭りは、神楽の演目名から「鬼神殿」とよぶこともあるようだが、六年前からは神事のみでなく、地元有志による手づくりの屋台が出るようになり、多くの来訪者で賑わうようになった。

宮山神社は、今回の地震で拝殿が完全に倒壊し、本殿も傾いた。しかし、それでも「祭りはやるう」となった。拝殿の跡に台を組み、露天の拝殿・舞台とした。舞台の周りを囲むように屋台を並べた。露天の舞台で繰り広げられる神楽、そのまわりで歓声を上げる人びと。物理的なモノが崩れてしまっても、人びとのな

かある気持ちと伝えてきた暮らしは崩れていない。そればかりか、屋台と混じり合った露天の舞台で鬼神殿を催すというあらたな姿を生み出した。

地域でつくりあげる「復興」

じつは、この宮山神社は、享保二〇（一七三五）年に村内の別の集落である布田の山中から現在の場所に移されている。その理由は、豪雨による地滑りで崩落する可能性があったためだと伝承されている。つまり、この神社そのものが、すでに西原村が経験していた「復興」の姿でもあったのだ。

「もとに戻す」ことにこだわりすぎるのではなく、「変化をうけとめて、つくりあげていく」ということ。被災地で悩む日々のなかで、地域の暮らしに根ざした「復興」の、ひとつのかたちを見た思いである。

歴史資料ネットワーク

——阪神・淡路大震災以来の歴史資料保全の歩み

おくむら ひろし
奥村 弘

神戸大学大学院教授
歴史資料ネットワーク代表委員

多発する災害と史料ネットワークの広がり

一九四八年の福井地震から、一九九五年の阪神・淡路大震災まで四七年間、日本の都市部では震度六弱以上の大規模地震は起こらなかった。阪神・淡路大震災が、ボランティア元年とよばれたことに象徴されるように、市民に基礎を置いた大規模自然災害対応は、この震災をとおして社会的に通念化し、歴史文化の領域でもはじめて組織的な対応がおこなわれた。関西の歴史学会を中心に歴史資料ネットワーク（略称史料ネット）が組織された。史料ネットは倒壊家屋から一五〇〇箱におよぶ歴史資料を保全するとともに、阪神・淡路大震災資料の保存にも携わった。現在、史料ネットは学会会員と歴史文化に関心をもつ多様な市民も含めた個人会員により活動を続けている（史料ネットの詳細はHP <http://sinyo-net.jp/>

参照）。

阪神・淡路大震災以降、次々と直下型地震が起こり、二〇二二年の東日本大震災後も、淡路島（二〇二三）、長野県北部（二〇一四）、昨年の熊本、鳥取中部と地震が続き、大規模水害も恒常化している。史料ネットは阪神の経験を災害の現場に伝え、活動を支援してきた。現在、二〇を超えるほぼ府県を単位とした歴史資料保全組織が立ち上がっている。史料ネットはこれらを緩やかに繋いでおり、各地の状況共有と相互支援を強めるため、二〇一五年に神戸で第一回全国史料ネット研究交流集会を開催、「神戸宣言」を採択し、二〇一六年に第二回（福島県）、第三回（愛媛県）と継続されている。

市民の手で地域の歴史遺産を守る

史料ネットは、被災地域の歴史資料である（被災歴史資料）と、大災害そのものを伝える（災害資料）の二種類の歴史資料保存を進めてきた。文化庁が指定文化財を中心とするのに対して、この多くは住民の身近にある未指定の多様な歴史資料であり、史料ネットはこれを地域の歴史遺産と位置づけ、保全を進めている。



上：2009年、兵庫県佐用町水害で保全された近代史料
下：津波被災史料のクリーニング



阪神・淡路大震災時の伊丹での巡回調査

また身近な史料だけに、水損や破損については所有者レベルでの迅速な対応が重要であり、市民レベルの緊急対応策について、文化財保存研究者や修復家ともに実践的な研究と試行を進めてきた。現在、東日本大震災津波地域の被災歴史資料のクリーニング活動を市民ボランティアの方々と進めるとともに、市民が水損史料に応急できるよう、日常品を使った水損史料保全ワークショップ等をおこない、歴史資料の減災に向けた活動を進めている。

歴史資料という古文書や著名な人物の文書が想起されることが多く、阪神・淡路大震災では、史料ネットのメンバーが被災地域を巡回し、ビラやチラシなど住民一人一人の記憶にかかわる身近な史料も地域の記憶を次世代に繋いでいくうえで重要であることを住民に説明して理解を得ることが重要であった。東日本大震災では、写真や位牌等、個人や地域の史料が、消防等により瓦礫のなかから見つけられ保存された。被災者に返還され、史料ネットが支援している宮城ネットに史料保全をお願いが市民から次々と寄せられた。市民レベルで記憶を次世代に引き継ぐことへの関心は大きな広がりをもち始めている。各地のネットワークは、これを基礎に、市民と歴史文化関係者が協力し、災害の多発する日本列島において地域の歴史遺産を守る活動を強めている。さまざまな形でこの活動への参加をお願する次第である。